山口大学教育学部研究論叢　第 72 巻　327 頁～ 332 頁　2023 年 1 月

古代日中比較文学の同一と差異

－「雪」描写とその概念を中心として－

吉村　　誠 *

The Identity and Difference between Ancient Japanese and Chinese Comparative Literature-----Focused on the Discription and Conception of "Snow"

YOSHIMURA Makoto*

（Received September 22, 2022）

古代日本文学は中国文化の影響を多く受けている。しかし事物への概念や表現方法が必ずしも中国の影響かどうかは判別しにくいものもある。事物や表現が同様だからと言って影響関係にあるとは一概に言えないからである。そこで本稿では具体的に「雪」の概念や描き方を例にして、その関係を考えてみる。

「雪」が厳冬期の行路難渋や苦寒という意味では当然のことながら一致している。また影響関係は不明であるが、五穀豊穣の予祝的なものという認識は共通している。しかし『万葉集』では「遠い山に降るもの」という概念があり、神の存在する場所に降る神聖なものという認識がある一方で、中国では神仙的な彼岸と区分するという意味があって、ここが本質的に相違が見られる所である。

本稿では宴席を中心とした「雪」については考察していない。このことについては別稿で論じる。

1．はじめに

古代日本文化は中国文化からの影響を多大に受けている。文学も例外ではなく、従来日中比較文学研究において、『万葉集』と六朝や初唐文学の影響関係が解明されてきた。しかし一方で内容が類似していても影響関係までは不明な物、また風土や文化的な伝統から相違するものもある。

景物表現は、中国にあっては詩の六義にいう「賦」という直叙法で描かれ、謝霊運や謝恵連に代表されるような叙景詩が誕生する。六朝時代には『文心雕龍』で景と情の関係を説いた「物色」という概念で理論化される。その過程は刁文慧氏に詳しい論がある[1]。

一方で日本では古代歌謡に見られるような比喩的対象や国見表現としてあったものが、「物色」の影響や景物の直接的な叙述により「情」を表出する叙景歌へと変化していく過程をみることが出来る。叙景歌の成立については、従来様々な論があるが、日中両者の景物表現において、自然に対する見方が神概念と神仙という文化的相違や、情を引き出す過程など相違も見られて、一概に表現の一致だけでは影響関係まで指摘することは難しく、表現的な一致による直接影響関係の有無を考えるには方法的な理論が必要になってくる。辰巳正明氏は『文心雕龍』などの詩論の影響があるとされているが、この情と景の関係はさらに掘り下げる必要があろう[2]。

そこで本稿では自然景物として両風土に共通する「雪」表現を取り上げて、『万葉集』と古代中国文学との間で表現だけでなく概念も含めて、中国文学から影響を受けたものと受けなかったものの様相やその理由を考えてみたい。

2．万葉集における「雪」概念

『万葉集』に「雪」が対象として詠まれる時、自然景物としてそのあり方が詠まれる場合と、詠物や季節の情緒として、情を引き出す対象として詠まれる雪との二種類のあることがわかる。そこで「雪」そのものがどのようにとらえられているか、顕著な例を掲げてその概念を

＊　山口大学名誉教授 y_makoto@yamaguchi-u.ac.jp

1　刁文慧　南朝至初唐风景诗艺研究　北京语言大学I207.22

2　辰巳正明『万葉集と比較詩学』1997. 4 おうふう

考えてみる。

大殿の　この廻りの　雪な踏みそね　しばしばも降らぬ雪ぞ　山のみに　降りし雪ぞ　ゆめ寄るな人やな踏みそね　雪は（巻19・4227）

反歌一首

ありつつも見したまはむぞ大殿のこの廻りの雪な踏みそね（同・4228）

右二首歌者三形沙弥承贈左大臣藤原北卿之語作誦之也　聞之傳者笠朝臣子君　復後傳讀者越中國掾久米朝臣廣縄是也

この歌は左注によると藤原房前の館で房前の言葉を受けて三形沙弥が歌を作り、誦唱したものが伝誦されて家持の手元に届いたとある歌である。問題なのはその歌内容である。房前の言葉であることを基本にとらえても、館に降った雪は踏むなと言っている。一般的には人踏によって、積雪の景観が壊れることを言っているという解釈が多いが[3]、歌中には、「しばしばも降らぬ」「山のみに降る」とその理由が言われていることに注意される。

この他にも次のような歌に注意される。

十一日大雪落積尺有二寸　因述拙懐歌三首

大宮の内にも外にもめづらしく降れる大雪な踏みそね惜し（巻19・4285）

天平勝宝５年の正月11日に大伴家持が詠んだ宮廷での歌であるが、「惜しいから踏むな」という点ではこの歌と同様の思いが述べられている。尾崎暢夫氏は「大宮の内にも外にも」という表現の「外」に房前館での歌との関係のあることを指摘されている[4]。

奈良の都を中心とした大和地方は、現代とほぼ同じ気候であるとするならば、降雪地帯ではなく、時折しか降らず、また積雪することも少ない。いわゆる里雪というのは一年を通してほとんどない。従って「しばしばも」降らない珍しいものである。ここに豪雪地帯と異なった非日常の「雪」をめでたい物という観点や豊穣をもたらす予祝性が含まれてくる。それが自然景物を対象とする詠物という意識的な文学創作の対象に雪も含まれて来るものと思われる。

豊穣予祝ということでは、万葉集中にも数首の歌の観念に認められる。それが中国にも同様な観念のあることは知られているが、関係は不明である。

中国における同様の観念は、最近では孫立春氏が指摘されているように[5]、『文選』「雪賦」（謝惠連）には、

盈尺則呈瑞於豐年，袤丈則表沴於陰德。

とあり、その李善注に

毛萇詩傳曰、豐年之冬，必有積雪。

と注されている。他にも

氾勝之書曰、取雪汁以漬原蠶矢。漬之五六日。釋、因摩之。雜穀種。使稼能早。故謂雪五穀之精也。

（『藝文類聚』巻２「天下　雪」部）

とあり、雪により害虫が凍死し駆除され、「五穀の精」というとあり、五穀豊作と雪の関係を言っている。しかし一般的にこれらの中国詩文の観念と万葉歌との関係をつなぐものは見当たらなく、その関係は不明であると言うしかない。

4227番歌に詠まれる雪は、珍しいという観念を示していると同時に「神聖さ」の観念も有している。それは「山のみに降る」という言葉である。実景として山地に降る雪を見ている経験から発せられている言葉であると理解出来る。日常的には南の吉野や金剛葛城山の積雪を見ているのであろう。しかしそこの歌はうした実景を象徴化した観念を有すると思われる。

山に降る雪は、

大納言大伴卿歌一首　未詳

① 奥山の菅の葉しのぎ降る雪の消なば惜しけむ雨な降りそね（巻３・299）

橘宿祢奈良麻呂應詔歌一首

② 奥山の真木の葉しのぎ降る雪の降りは増すとも地に落ちめやも（巻６・1010）

三國真人人足歌一首

③ 高山の菅の葉しのぎ降る雪の消ぬと言ふべくも恋の繁けく（巻８・1655）

が見られる。①は、大伴旅人の歌である。脚注の「未詳」というのは、何が未詳なのかわからない。事情のわかりにくい歌であるが、雪が奥山の菅の葉の生えている所に降るという観念が基盤にあり、奥山とは人跡未踏の地の観念がる。また③にもあるが「菅の葉」は神祭りにも用いられるものである。これが「消なば惜しけむ」の序詞としての位置であるのか、そのまま奥山の雪を眺めているのかは議論の分かれる所であるが、眼前の雪を見ていたとしても、「奥山」の「菅の葉」をしのいで降る雪というのは、人里に降る雪とは異なり、神々の存在する場所に降る雪という概念を持っているであろう。

②は、この歌の前に、天平８年11月に葛城王、佐為王が臣籍降下し橘姓を賜った時の御歌があり、その続きとなっているので、その時の詔に応えたものと考えてよいものであろう。諸兄自身でなく、子の奈良麻呂が応じることに疑問は残るが、諸註釈が指摘するようにこの歌の内容はこのときの詔勅に引用された和銅元年11月に諸兄の母の縣犬養三千代に橘姓を賜った時の元明天皇の詔

橘者果子之長上、人之所好、柯凌霜雪而繁茂、葉經寒暑而不彫、与珠玉共競光

[3] 伊藤博『万葉集釋注』など

[4] 尾崎暢夫「大宮の雪」『大伴家持論攷』1975.９笠間書院

[5] 孫立春「『万葉集』と『藝文類聚』における詠雪詩歌の比較」『万葉古代学研究年報』第５号　2007.3

とあるものに拠ったと考えて間違いはない。

「地に落ちめやも」の主語は「雪」であるのか「橘の実」であるのかわかりづらいが、詔勅に拠ったものとすれば「橘の実」となる。

注意すべきはこの雪は「奥山」に降る雪としている点である。依拠した詔勅は、霜雪の逆境にあっても橘の果実は繁茂し葉も寒暑に拠らず落ちないという意味での霜雪であり、「奥山」ではない。しかし歌の詠まれた季節は冬であるので、実景としてこの時周辺の山に降っている雪を属目したものとも受け取られるが、雪の降る場所を奥山とした所に人里とは隔絶した神々しさを示そうとしていることが伺われる。

③は、「冬相聞」に分類されている歌である。「消ぬ」の序詞となっていて、他の歌にも多用されるものであるが、①の歌と同様に人の行かない「高山」が降雪の場所となっている。

この三首の雪に見られる共通点は、人里離れた山に降るという認識が見られることである。そういう意味では仙境である崑崙山や天山の積雪を詠む漢詩文と同様な発想をとっている可能性はある。このことは次章で述べるが、漢詩文でも人を寄せ付けない険峻な山という概念の中に雪が描かれている。しかし漢詩文において、里雪に対して山岳に降る雪と対比させたものや、雪が山岳に降ることを前提として描いたものはない。

人を寄せ付けない雪という意味では、常陸国風土記の有名な富士山と筑波山の説話があるが、厳寒の中での降雪という雪の一般的な概念としての中で登場しているものである。

しかし房前館歌の「山のみ」に降る雪は、山岳の険峻さを形容する従属性を持っておらず、人里とは離れた異世界であるという要素を強調している性格がある。そうした意図で語られている歌に赤人の富士山歌のあることを見逃してはならない。多く論のある歌であるが、山岳降雪という観点から次に再論してみる。

3．山部赤人富士山歌の雪

山部宿祢赤人望不盡山歌一首并短歌

天地の　別れし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河なる　富士の高嶺を　天の原　振り放け見れば　渡る日の　影も隠らひ　照る月の　光も見えず　白雲もい行きはばかり　時じくぞ　雪は降りける　語り継ぎ　言ひ継ぎ行かむ　富士の高嶺は（巻３・317）

反歌

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける（同・318）

有名な山部赤人の富士山歌である。従来多くの論があり、叙景歌の成立からの観点や近年では菅野雅雄氏と梶川信行氏が、主題について畏敬と畏怖という観点から論争のあった富士山歌である[6]が、雪に着目すると異世界に降るという観念を有している。以前に山岳讃美表現という意図で触れたことがある[7]が、雪が異世界に降るという観点からとらえなおしてみる。

まず最初の「天地の　別れし時ゆ　神さびて　高く貴き」とは、天地開闢の時以来、神々しくて気高く貴い」という意味になるが、この富士の高嶺の場所は「天地の別れた時」の世界が現在まで継続しており、高天原の神々の世界であるということを示している。天地開闢以来の昔であるので神々しくなっているというのが一般的な解釈であるが、この「ゆ」は継続している意味であると解されるので、天地開闢以来のまま神々しいととらえるべきであろう。天地開闢とは神々の世界であるので、富士の高嶺は神々の世界であると見ているのである。従って「振り放け見」る対象が「天の原」となる。

「天の原」とは「天空」という意味で使われているが、呪的な意味合いも含まれており、振り仰ぐ対象は異世界のものであるという色彩が強い。今更再論する必要もないが、「天の原」は月を振り仰ぐ叙述を除いて、次の三例に顕著な特徴を持つ。

① 天の原振り放け見れば大君の御寿は長く天足らしたり（巻２・147）

② 天の原　岩戸を開き　神上り　上りいましぬ（巻２・167）

③ ひさかたの　天の原より　生れ来る　神の命（巻３・379）

①は、天智天皇が危篤の時に倭太后が奉ったと題詞にある歌で、意味は不明確であるが「降り放け見る」対象は呪的な世界を示していると考えられる。従って死者の赴く天空の世界を表している。②は、柿本人麻呂の草壁皇子挽歌で、草壁皇子が神話的な天上世界に戻る時の描写である。また③は、「大伴坂上郎女祭神歌」と題詞にある長歌の冒頭部分である。神の生じる世界として天の原が叙述されている。

このように「天の原」は、神話的異世界にあり、振り仰ぐ世界は異世界であることを示している。赤人歌は、

---

[6] 梶川信行「赤人の〈叙景歌〉ということ―「望不尽山歌一首」の再検討を通して」「語文（日本大学）」76号　1990.3
菅野雅雄「不尽の雪―梶川信行氏の論を読んで」『美夫君志』41号　1990.10
菅野雅雄「「不尽の雪」再考」『美夫君志』43号　1991.10
梶川信行「赤人の「望不尽山歌」をどう論ずるか（その二）」『美夫君志』44号　1992.3
梶川信行「《富士山》の誕生―山部赤人の「望不尽山歌」論のために」『近畿大学教養部研究紀要』25巻２号　1993.12

[7] 吉村誠「山岳神性讃美表現の性格」『大伴家持と奈良朝和歌』2002.9　おうふう

異世界であることを前提として富士山の形容がある。

その「天の原」の様子は、「渡る日の　影も隠らひ照る月の　光も見えず」となっている。漢詩文にも同様な表現があるが、富士山の北からの視点である。赤人は田子の浦から見ており、実景をもととはしておらず、富士山の高い様子を描いた表現である。これは「見れば」が国見表現の流れとして、国見的情景の虚構の中で説明されているものである。

これらの句については、漢詩文との関係で以前に述べたことがある。影響というよりも類似表現である。

積峡忽復啟。平塗俄已閉。巒隴有合沓。往來無蹤轍。晝夜蔽日月。冬夏共霜雪。（『藝文類聚』「登廬山絶頂望諸嶠詩」宋謝靈運）

廬山の険峻さを形容した詩である。人の往来の跡がなく、一日中暗く、一年中霜雪に覆われている様子が示されている。赤人富士山歌と同じ形容であるが、赤人がこの詩を見ていたかどうかは不明で、影響関係まではわからないが、高峰を讃美的に描く方法としては同様であることに注意される。

「白雲も　い行きはばかり　時じくぞ　雪は降りける」は実景であるとも見られるが、「時じくぞ」については、人の住む日常環境では雪の降らない季節でも降るという異常な世界を示しており、嘱目からの驚異であることを示している。

この降雪については、後に大伴家持や池主歌にも類同表現が居られる。

立山賦一首并短歌　此山者有新川郡也

天離る　鄙に名懸かす　越の中　国内ことごと　山はしも　しじにあれども　川はしも　多に行けども　統め神の　領きいます　新川の　その立山に　常夏に　雪降り敷きて　帯ばせる　片貝川の　清き瀬に　朝夕ごとに　立つ霧の　思ひ過ぎめや　あり通ひ　いや年のはに　よそのみも　振り放け見つつ　万代の　語らひぐさと　いまだ見ぬ　人にも告げむ　音のみも　名のみも聞きて　羨しぶるがね（巻17・4000）

立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし（巻17・4001）

敬和立山賦一首并二絶

朝日さし　そがひに見ゆる　神ながら　御名に帯ばせる　白雲の　千重を押し別け　天そそり　高き立山　冬夏と　別くこともなく　白栲に　雪は降り置きて　古ゆ　あり来にければ　こごしかも　岩の神さび　たまきはる　幾代経にけむ　立ちて居て　見れども異し　峰高み　谷を深みと　落ちたぎつ　清き河内に　朝さらず　霧立ちわたり　夕されば　雲居たなびき　雲居なす　心もしのに　立つ霧の　思ひ過ぐさず　行く水の　音もさやけく　万代に　言ひ継ぎゆかむ　川し絶えずは（同・4003）

立山に降り置ける雪の常夏に消ずてわたるは神ながらとぞ（同・4004）

立山を詠んだ大伴家持と池主の歌である。ここに常夏に雪の降り積もる様子が描かれ、特に家持歌では、「統め神の　領きいます」と神の支配する山として描かれる。また両者とも反歌では「神からならし」「神ながらとぞ」と神性を述べている。家持、池主歌では、山の神々しい様子を自然描写に近い形で歌われており、赤人歌のように虚構に近い形はとられていないが、立山の讃美に神性が持ち出され、そこに夏の降雪表現があることに注意される。

家持歌に見られる「統め神」は統率する神という解釈が多くを占めるが、辰巳正明氏は皇祖神と関係のある神とみられている[8]。しかし立山に祀られる神を天つ神系であると拡大解釈しても、具体的な神名が見当たらなく、また「すめらみこと」の解釈が、「統率するお方」というよりも「澄んだ心のお方」という見方が有力になって来ていることと、「統率する神が領有する」では畳語的になるので、さらに意味を考える必要があろう。

「すめ神」は万葉集中には７例みることが出来る。

①吾が大君ものな思ほし須賣神の継ぎて賜へる我なけなくに（巻１・77　御名部皇女）

②神代より　言ひ伝て来らく　そらみつ　大和の国は皇神の　厳しき国（巻５・894　山上憶良）

③ちはやぶる鐘の岬を過ぎぬとも我れは忘れじ志賀の須賣神（巻７・1230　古集）

④万代に　あり通はむと　山科の　石田の杜の　須馬神に　幣取り向けて　我れは越え行く　逢坂山を（巻13・3236）

⑤須賣可未の　裾廻の山の　渋谿の　崎の荒礒に　朝なぎに　寄する白波　夕なぎに　満ち来る潮の　いや増しに　絶ゆることなく　いにしへゆ　今のをつつに　かくしこそ　見る人ごとに　懸けて偲はめ（巻17・3985　大伴家持「二上山賦」）

⑥天離る　鄙に名懸かす　越の中　国内ことごと　山はしも　しじにあれども　川はしも　多に行けども　須賣加未の　領きいます　新川の　その立山に　常夏に雪降り敷きて（巻17・4000　大伴家持「立山賦」）

⑦住吉の　我が須賣可未に　幣奉り　祈り申して　難波津に　船を浮け据ゑ　八十楫貫き　水手ととのへて　朝開き　我は漕ぎ出ぬと　家に告げこそ（巻20・4408　大伴家持）

「すめ神」の表記は原文を用いる。①②は、統治する

[8] 辰巳正明「奈良朝の皇神と神観念の形成」『国学院大学日本文化研究所紀要』97号　2006.3

代々の天皇や皇祖神を指している。③は、現在の博多湾入り口の志賀神社の祭神である表津綿津見神、仲津綿津見神、底津綿津見神の海神三神。いずれも伊邪那岐命の禊祓の時に生まれたとされる。④は、延喜式内社である天穂日命神社であり、祭神天穂日命は天照大神の子である。⑤は二上山に祀られる祭神であり、当時支配していた射水国造の祖先神と見られる。⑥は立山に祀られる神であるが不明。⑦は住吉大社の神である。①②はともかくとして、地方神としてある他の「すめかみ」は、いずれも朝廷からの幣帛が奉られている神であるので、以前に朝廷からの班幣社であると考えたことがある。さらに深く考えることが必要であろうが、ここでは皇室と関係がある神にしても、班幣社であったとしても、単なる自然神であるというよりは祖先とつながりのある神であるという性格を確認しておく。

このように季節外れの降雪の場に神の存在を認め、とりわけ赤人富士山歌では、神々の世界として見上げる所に讃美性を高めており、降雪場所は人間の常住する地域ではなく、神々の世界であることを前提に述べている。またその神々は単なる自然神ではなく、祖先神として位置づけられる概念を持っているものである。

このように考えてくると、房前館における積雪歌の句である「山のみに」は、日常経験から来る認識から発するばかりでなく、降雪場所は神々の存在する異世界であるという観念を生み出していると言える。

４．中国詩文における雪概念

中国においては、古代詩文の作られた中原は降雪地帯である。従って雪は行路を阻むものとして描かれるのが一般的である。そうした雪への概念は『万葉集』にも「降る雪を腰になづみて参ゐて来し（巻19・4230）」などと表現されていて、当然のことながら同等の概念を持っている。

漢詩文では同様なものに

飛雲霧之杳杳，涉積雪之皚皚。（『文選』班叔皮「北征賦」）

などとあり、この例では北方遠征の時に雪で難渋する様子が描かれている。雪は行く手を阻むものとして示される。こうした概念の例は他に多くある。

しかし一方で、白色の譬喩や雪中松の孤高性など日本にはない描かれ方もしている。

眉如翠羽、肌如白雪、腰如束素、齒如含貝（『文選』「登徒子好色賦」宋玉）

これは、女性の肌の白さを雪の白さに譬えたものであり、多く用例がある。この他にも布の白さ（「怨歌行」班婕妤）、食材（「七啟」）、剣の肌（「七命」張景陽）などに「白」を譬える語として用いられている。

また、次の用例は呉都の竹を叙述したものである。緑の茎は霜にも負けず、雪を上に積もらせているという意味であり、雪は極寒の象徴で、竹はそれに耐える状態を言う。

苞筍抽節、往往縈結。綠葉翠莖、冒霜停雪。（『文選』「吳都賦」左太沖）

この他にも、態度の純粋さの例えとして表現されているものもある。

雅杖名節。雖遇塵霧、猶振霜雪。（『藝文類聚』「三國名　　臣序贊」袁彥伯）

そうした中で山岳降雪の描かれ方は以下の詩文に認めることが出来る。

① **其山則崆**峒**嶢、嵣崥嶚刺。岝峹巑嵬、**嶮**巇巉。幽谷嶜岑、夏含霜雪。**（『文選』「南都賦」張平子）

② **積峽忽復啟。平塗俄已閉。巒隴有合沓。往來無蹤轍。晝夜蔽日月。冬夏共霜雪。**（『藝文類聚』「登廬山絶頂望諸嶠詩」宋謝靈運）

③ **石險天貌分。林交日容缺。陰澗落春榮。寒巖留夏雪。**（『藝文類聚』「遊太平山詩」齊孔稚珪）

④ **天山冬夏有雪。**（『漢書』「西域傳」）

⑤ **聯雪隱天山、崩風盪河澳、朔障裂寒筋、冰原嘶代**馱**。顏、庾同時、未詳所見。**（『藝文類聚』「庾中丞昭君辭」）

①は張平子が、後漢光武帝の時代の都であった南陽県宛を讃美する目的で作った辞賦である。宛の土地柄を紹介する中でそこを取り巻く山々の険峻さを述べる中で、夏の積雪を言う。②は先にも掲げた謝霊運が廬山の様子を述べたものであるが、ここに霜雪が一年を通してあることを述べる。また③は、孔稚珪が太平山を述べたものであるが、夏季にも雪の留まっている様子が述べられる。そして④⑤は、天山（崑崙山）を一年中の降雪と雪に隠れる自然の険しい様子として描いたものである。

全ての用例を掲げたわけではないが、いずれも人を寄せ付けない険しい山の様子が述べられており、夏季の積雪が一つの要素として示されていて、赤人富士山歌や家持、池主の立山賦と同様の概念が見られるが、ここには山岳積雪に対する神性は見られない。雪は冬季行路難渋と苦寒の象徴としての描かれ方であり、山岳の険峻さを示す要素としてあるだけであり、異世界という概念はない。

険しい場所で人を寄せ付けない詩文は多く見られるが、人倫遠く離れたものとして描写は神仙的なものとして多く描かれている。しかしそれは離俗、反俗という俗塵との対比がある。

杖策招隱士。荒塗橫古今。巖穴無結構。丘中有鳴琴。白雪傍陰崗。丹葩燿陽林。非必絲與竹。山水有清音。何事待嘯歌。灌木自悲吟。（『文選』左思　招

隱詩）

最初の部分であるが、隠者を訪ねる時の山の様子を描く。そこには白雪が日陰の斜面に残っており、冬場の厳しい様子やその名残を示す表現として表れているが、険しい山中に琴の音が響き、俗世を離れた世界を描く。そして次の章では隠者への憧憬と俗世との対比を述べる。

此山具鸞鶴、往來盡仙靈。（『文選』從冠軍建平王登廬山香爐峰　江文通）

廬山は山西省にある名峰であり、先にも掲げた謝靈運詩のように多くの詩文が残されている。険峻な山岳は常に雲霧に覆われていて、人を寄せ付けない山として知られている。この詩は宋の江文通が建平王に従って香爐峰に登った時の詩である。香爐峰の様子が描かれていて、険しい地形やそこに住む動植物を神仙的な概念で描いている。

その描かれ方の特徴を見ると、そこは隠士のいる場所であったり、険峻な山岳の形容であったりする。その表現意図は人倫離れた神仙としての意味づけで山岳讃美となっていて、雪に対する観念はただ障害となったりする厳寒の観念があるのみである。山の讃美描写に神仙的な神の存在を述べるものがあっても、降雪場所が神々の世界に降るという概念は認められない。

５．まとめ

以上のように『万葉集』と中国詩文の「雪」の描かれ方を比較してみると、極寒で行路を阻害し難渋させるものという雪への概念は両者同様であるが、山岳積雪の描かれ方を中心に見ると、『万葉集』では神の世界に降るという概念があり、従って「山のみに降る雪」と描かれるのに対し、中国詩文は人間界と神仙世界の境界の中に存在するものとして描かれる。

この相違は端的に言えば、「神」に対する概念の相違であろう。日本の神は、自然神のアニミズム的な神と前後して、「皇神」のように朝廷とつながっている神や祖先神としての神の要素が強い。そして天地開闢神話に見られるような神々の概念を持って、畏敬の念を自然に対して抱いている。

一方で中国は、崑崙山の西王母や泰山の泰山府君のように後に道教に習合される自然神としての要素を持ち神仙世界を構築する。また神仙世界は隠者の世界であり、老荘思想を背後にもつ俗と聖という対比構造を持っている。また祖先に対しては儒教的な祖廟での祭祀が中心であり、自然神が祖先神となる過程はない。

雪は、風土的には極寒の中で我々の行動を阻害するという概念に共通性を持ちながら、神々の世界のものという畏敬的な念を持って描かれる『万葉集』の歌と、人倫遠く離れた神仙世界との境界にあり、また聖なるものとして俗との対比概念を成立させていく古代中国文学の概念との文化的相違を見ることが出来る。

本稿では、公宴等における雪月花を中心とした自然物描写に関するものは扱っていない。文頭にも記したように描写の概念が異なるからである。公宴における雪月花については別項で論じたい。

謝辞

本研究はJSPS科研費21K12582の助成を受けたものです。